

学 園 だ よ り

太 白 山

(令和2年8月発行)

宮城県さわらび学園

〒982-0215

仙台市太白区旗立2丁目4-1

TEL : 022-245-0333

FAX : 022-245-0515

<http://www.pref.miyagi.jp/sawarabi/>

学園ホームページもご覧ください

「四回目の学園勤務」

副園長 亀井 義憲

この春、四回目の学園勤務を命じられ、五年ぶりに戻りました。私が初めて学園に勤務した時は「教護院」と呼ばれていた時代で、施設の目的や使命は非行（性）の除去であり、振り返ってみればその指導は児童と職員がウイズの精神に基づいて、共感しながら泥臭く喜怒哀楽をぶつけ合っていたことを思い出します。当時は退園すれば指導は終了。年長児指導はなく分教室を卒業すれば自動的に退園。児童への指導は児童集団がビシツツとしまっていればいるほど良い指導とされていた時代のように思います。また、職員には被措置児童虐待の防止の意識は薄く、職員の言うことは絶対という風潮もありました。

平成六年児童の権利に関する条約の批准により児童の権利を重んじるように社会が変化し、平成九年の児童福祉法の改正では教護院から児童自立支援施設へと名称も変わりました。児童自立支援施設では、非行（性）を有する児童だけではなく、家庭環境その他の理由により生活指導を必要とする児童もその守備範囲とされました。職員は児童の権利擁護と被措置

児童虐待の防止の意識と実践を求められ、また、非行だけでなく様々な課題を持った児童が入園したことで非行児童専門に指導してきた職員は（他県の職員も含む）指導に混乱し、自信を失いながらも歯を食いしばってその混乱を乗り越えてきました。

近年は当たり前のように児童自立支援施設には、個別支援職員、家族支援担当、心理士職や医師の配置があり、児童の支援は専門性が進み児童のニーズや特性に沿った支援が展開できるようになってきました。とても嬉しいことです。

このように時代は変化してきましたが、感化院から始まり、児童自立支援施設に至るまで諸先輩方の努力と歩みや私が大切にしている「人間と人間の温かいふれあい」を忘れないで最後の学園生活を楽しみたいのです。

「青葉寮について」

青葉寮 寮長 菅原 匡

今年度は児童八名、職員六名（内二名は人事異動で入れ替え）の体制です。児童の担当者変更は最小限にし、昨年度から引き続き児童、職員共に『寮内の和』をキーワードにした寮運営を行っています。

三月下旬からの新型コロナウイルス感染症で、各種行事の変更や中止、進学進級にも影響が生じ、今まで体験したことのない閉塞感を感じました。行事は児童を大きく成長させる一面もあるため、代替え行事を組み込む等、生活意欲を失わないよう児童に働きかけています。

素直で優しい児童も多く、職員の働きかけに応じ、表面上は目標を見失わないように努力をしていますが、気持ちにゆとりが無く、受け流せずに過剰反応し、相手の欠点ばかりに目が行く等、集団のまとまり感は一進一退の状態です。

グループワークを通じ青葉寮が大切にしている事を再確認しながら、適度な静養を日課に取り入れ、軌道修正を図っています。

今後も児童主体で生き生き生活出来る環境を整え、『和』が高まる支援を継続したいと考えています。

「男子スポーツ活動について」

野球部監督 夏谷 朔

今年度の野球部は春からミーティングを重ねて、野球を通して学ぶことを全員で共有しています。挨拶や礼儀、仲間や道具を大切にすること、目標を持って活動すること、などを児童に伝えながら練習に励んでいます。チームとしての課題も多くありますが、その都度みんなで話し合い少しずつ心も技術もレベルアップしてきました。

しかし、今年度は新型コロナウイルスの影響が大きく、毎年開催される東北・北海道地区大会が中止になり、外部との練習試合もできない状況が続いています。児童にとっても、練習の成果を発揮する機会がなく、我慢の時期が続いていました。

その中で、七月に試合を実施することができました。近所の球場を借りて、児童の対戦相手として学園職員が集まった形ですが、多くの児童が初めての試合経験のため貴重な経験を積むことができました。一つのプレーで一喜一憂する姿を見て、今年度は児童の安全に配慮しつつも、野球を通して学び成長できるように、限られた範囲ですが精一杯スポーツ活動を充実させたいと思います。

「女子スポーツ活動について」

バドミントン部監督 木村 友香理

今年度のバドミントン活動の目標は「生活バドミントン」です。バドミントンの技術だけが大切なのではなく、挨拶・礼儀・マナー、そして学園生活をしっかりと送ることができていることが何よりも重要だと、年度当初のミーティングで確認しました。女子児童二名という少ない人数ではありますが、準備から片付けまで協力して練習に励んでいました。

しかし、新型コロナウイルスの影響で、六月の市中総体が中止となり、目標が見失われてしまいました。そこで、一か月遅れではありますが、七月二日に園内大会（すみれCUP）を開催しました。たくさんさんの学園職員、分教室職員に協力いただきながら、日頃の練習の成果を発揮することができました。また、練習場面では女子嘱託職員にもボランティアとして参加いただきました。

新型コロナウイルスの影響により、例年とは異なる動きが多くなりますが、そんな時こそ「生活バドミントン」を意識し、日々の学園生活を丁寧に送ることから意識付けできればと思っています。

「すみれCUPの感想」

すみれ寮 A

今回の大会で心に残った試合は二つあります。

一つ目は、ダブルスでKちゃんと優勝できたことです。Kちゃんとチームを組み、一生懸命試合に臨めました。ダブルスでそんなに試合をしたことがなかったから優勝でき、本当にうれしかったです。Kちゃんと協力して声をかけながら楽しくプレー出来ました。良かったです。

二つ目はシングルの試合です。前日、スポーツ係の先生からシングルスは強い先生が出ると言われ「なんで子どもたちを勝たせないの」と思っていました。そしたら、先生に勝ち負けじゃなくて負けてもグッと堪えられた方が良いよ!!と言われてびっくりしました。大会当日のシングルスでは光平先生と試合をしました。とても良い勝負でした。最初の一セット取られたけど、次の試合の一セットを取ることが出来ました。二セットの中で負けるとしたか思ってませんでした。けれども先生が言った言葉が残っており、負けてもグッと抑えようと思っていまして。試合の中で暴発しそうになったり、もうやりたくないと思ったけど、光平



（野球部・バドミントン部活動風景）

先生も一生懸命やっていたから申し訳ないと思い、点を取られても深呼吸し落ち着いて勝てると思いつつやりました。最後は負けてしまいました。グッと堪えられて悔しい気持ちはあったけれど最終的に良い試合だったなあと思いました。

感想発表では自分の気持ちを素直に言えました。今後の目標も言えたので良かったです。次またこういう機会があったら今回の経験を活かしたいと思います。今回は明けの先生や分教室の先生などお忙しい中、私たちのために協力、参加いただき本当にありがとうございます。

「野外活動について」

実行委員長 都澤 智洋

昨今のコロナ禍、遅い梅雨明け、前々日の豪雨など、実施が危ぶまれた野外活動でしたが、七月三十日、三日に予定通り何とか無事に終えることが出来ました。

実施まで、たくさんの方の先生方に役割を依頼し、無理なお願ひもして参りましたが、先生方は快く引き受けてくださいました。また、児童がより楽しく活動するためにはどうしたらよいか、創意工夫を重ねる姿勢には、感心させられっぱなしでした。日頃から人として児童のお手本になっている、さわらび学園の職員の素晴らしさに改めて感動いたしました。

さて、野外活動当日ですが、暑くもなく、寒くもなく、ちょうど良いコンディションからのスタートとなりました。コロナ対策のために、館内ではマスクが必着となり、児童達はやや息苦しうでしたがこれから始まる活動に胸を高鳴らせていました。

初めのプログラムは「ソトどこ」でした。児童は五つのチームに分かれ、自然の家の敷地内を散策しました。着いてすぐでしたが、仲間と協力しながら取り組んでいました。次は野外炊飯

です。今年も焼きそばとピザ作りに挑戦しました。児童は、一生懸命火をおこす人、調理する人それぞれに分かれ、楽しく活動しました。時間がかかり、ナイトハイクは出来ませんでした。後片付けをたった二十分で終わらせてしまうなど、普段の生活力をしっかりと発揮していました。

そして二日目。みんなが楽しみにしていた沢活動でした。沢の水かさが高く、予定していた距離の半分ほどの実施でしたが、児童達のはじける笑顔、響き渡る歓声に、本当に実施できて良かったと安堵したのを覚えています。たった二日間の活動でしたが、きっと楽しい思い出として心に刻まれたと思っております。

最後になりますが、野外活動実施に当たり、児童達の健やかな成長を願い、有意義な活動になるようにと、温かな志をたくさんの方々にいただきました。末筆ではございますが、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

「野外活動に参加ついで」

広瀬寮 R

七月三十日から三十一日まで国立花山青少年自然の家で野外活動に参加

しました。ソトどこオリエンテーションをしました。いろいろなところを歩きました。

野外炊飯では火の係でした。とても楽しかったけどとても熱かったし大変でした。

ナイトハイクは野外炊飯の時間がオーバーしてできませんでした。

二日目の沢活動では水に慣れるのが難しかったけど冷たくて気持ち良かったです。最後まで行けなかったのが残念ですけど途中で行けたので良かったです。またなめらかな滝を上ったことが良かったです。とても滝の勢いが強かったです。でも滝の上からダイビングをしました。とても気持ち良かったです。そして、そこで記念写真を撮りました。

また、花山に行きたいです。



「子どもの“話す”と大人の“聞く”」

心理療法担当職員 及川 裕

人は生きていく限り、行き場のない怒りや孤独感、今後への不安などの感情を多かれ少なかれ抱えます。学園で生活する子どもたちは、社会での失敗体験を積み重ねている分、このような感情がより強いかもしれません。そして、こういった負の感情を抱えたまま生きることは心身の健康に深刻な悪影響を与える場合があります。感情や意識が感じられにくくなってしまいう「解離」、他者への暴力や盗み・自傷行為などで感情を発散する「行動化」、頭痛や腹痛などの形で現れる「身体症状化」などがその例です。逆に、自分の気持ちを言葉で表す「言語化」ができれば、心の健康が保たれやすいと言われており、学園の子どもたちの目標の一つとなっています。

そんな学園の子どもたちを見ると、言語化がうまくいかず行動化してしまいう子がいる一方で、以前なら暴れていた子が拳を握りしめて、たどたどしいながらも気持ちを言葉にしようとする場面も見られます。半ば興奮しながら「何でいつも俺ばっかり!」「職員の方がきついんだよ!」などと言うその表現は、社会で通用するくら

い上手とは言えませんが、感情のコントロールという意味では確実に成長を感じます。

もつとも、時間がたてば自然と言語化が身につくわけではありません。言葉による感情コントロールの習得には、大人の聞く姿勢が必要不可欠です。興奮した子どもが不満をしゃべり出したとき、大人は理由を説明して子どもの認識を改めさせようとしたり、不満を言うこと自体をタブーとして叱ったりするかもしれません。そうして言語化を封じられた感情は再び心の奥底に沈み込み、後になって暴力や自傷という形で現れます。大人が価値観や事情を飲み込んで子どもの言い分に耳を傾けることは難しいことですが、結局はそれが子どもの成長や大人との関係作りの近道であることが多いようです。学園や児童相談所の職員、原籍校の先生方、さらには御家族など、子どもに関わるすべての大人が子どもに話に耳を傾ける意識を持つことができれば、子どもの不平不満の裏側にある「愛されたい」というメッセージに気づきやすくなるかもしれません。

プール活動について」

スポーツ担当 大野聖太郎

今年度のプール活動は新型コロナウイルスや冷夏の影響で、なかなかプール開きが出来ずにいました。八月に入り、東北地方も梅雨明けし、気温も上がったことから七日にやっとプール開きを行うことが出来ました。子どもたちも待ち望んでいた、プール活動を行うことが出来、スポーツ担当としても、一安心です。

しかし、前述にもある通り、新型コロナウイルスの影響で、例年通りの活動が出来ないため、制限のかかった動きとなってしまいます。その中で少しでも楽しみながら活動できるよう、工夫を凝らしながら指導に当たってきたいと考えています。その一環として、今年度は「さわらび水泳検定」と銘打ち、子どもたちの泳力・記録向上に繋げていこうと考えています。個人の泳力に合わせたレベルから取り組み、着実にレベルを向上させていくことを目的としています。

今年度も子どもたちと一緒にプール活動を楽しみながら、記録向上に努め、全員が楽しみながら活動できるようにしていきたいと考えています。

今後の行事予定（抜粋）

- ・九月四日 プール納め
- ・九月一六日 秋の遠足（分）
- ・十月二九日 学園祭

※分…分教室行事

※新型コロナウイルスの影響で変更の可能性があります。

編集後記

梅雨も終わり、一気に夏本番の暑さになりました。暑い中でも子どもたちは元気いっぱい生活しています。秋には学園祭が予定されており、間もなく準備に入ります。引き続き、子ども、職員ともども頑張っていきたいと思えます。